

ヘブル人への手紙4章15－16節 「大胆に恵みの御座へ」

1A 弱さに同情できる方 15

1B 降りてこられた方

2B 引き上げることのできる方

2A 恵みの御座 16

1B 憐れみと恵みの受容

2B 折にかなった助け

3B 大胆な近づき

1C 恵みに変えられた御座

1D 聖なる御座

2D 流された血

3D 裂かれた垂れ幕

2C 子どものような信仰

1D 恐れなき自由

2D 御名による願い

本文

ヘブル人への手紙4章を開いてください。私たちは先々週、3章を学びました。午後礼拝で、4章のすべてを一節ずつ見ていきますが、今朝は、最後の2節に注目します。「¹⁵私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。¹⁶ですから私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

ヘブル人への手紙の著者(私はパウロではないか?と思いますが)、著者は、ヘブル人、すなわちユダヤ人が、その信仰のゆえに不信者のユダヤ人から迫害を受けていることを、この手紙の中で語っています。そうした中で、私たちは肉体によるいろいろな弱さを覚えます。そして、その困難と試練の中で、誘惑も受けています。イエス様に対する信仰から、少し遠ざかろうかなと考えている人々もいます。しかし、そうした試みを、主ご自身がすべて受けてくださったというのが、ここで著者が書いている内容で、励ましの言葉です。そして、私たちの弱さをよくわかっておられる方がおられるので、私たちが神の御座に近づくとときに、大胆に恵みによって近づけるのだということです。

私の知人の若者で、大学生の時のことで学校の友だちのことを話していました。何か話していると、ちょっと何か、一般の生活を知っているのかな?とふと感じることがあったそうです。そして、その学友は自分の家に誘ったそうです。すると、そこはなんと、皇居だったとのことです! その学友が皇室の人だったんですね。身近にいて、気軽に付き合っていて、それでその人は彼の友だち

だったので、それで大胆にも皇居の中に入ることができました。ちょうど、大祭司なるイエス様が、私たちのためにしてくださっているのが、こういったことです。

1A 弱さに同情できる方 15

1B 降りてこられた方

本文に、イエス様は、「**私たちの弱さに同情できない方ではありません。**」とあります。このギリシア語は、「共に苦しむ」という言葉になっています。ヘブル人への手紙で、私たちはこの方が御子であり、神ご自身であることを学びました。その方が血肉を持ち、私たちの兄弟となられました。

私たちは、「神」しかも「宇宙をも造られた方」というと、自分たちの苦しみや弱さには、何も同情することはできないではないか？とってしまいますね。けれども、聖書に示されている神は、感情豊かです。人々の姿に心動かされています。ノアの時代、「人の悪が増大し、その心に凶悪なことがみな、いつも悪に傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。」とあります。今も、世界に、自分の周りに、そして自分の内にさえ悪があります。主は心を痛めておられるのです。

しかし、それでも万物を造られた方が私たちの肉体の弱さに、どれほどまでに近づいてくださるのか？というのは、私たちの偽れない思い、疑問だと思えます。まさに重い皮膚病の中で苦しみもだえていたヨブが、「9:33 私たち二人の上に手を置く仲裁者が、私たちの間にはいません。」と訴えました。自分の今の肉体の痛みを訴えるにも、全能者の前で訴えるための仲立ちをしてくれる人がいないと叫んだのです。私たちが苦しんでいる時は、その時が、もっとも神が遠く離れていると感じてしまう時です。日本人がよく、過酷な現実を目の前にしたら、「神も仏もあるものか！」という言葉がありますね。キリスト者も、「主よ、なぜですか？」と、問うてしまうのです。

主なる神は、歴史を通じて人の弱さに同情しながらも、そのことを完全に示す時を定めておられました。それが約二千年前、ローマ帝国の時代、ベツレヘムでお生まれになったイエス様です。その肉体において、主は私たちの苦しみをすべて知っておられ、寄り添っておられます。

そこで、「**罪は犯しませんでした、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。**」とっています。イエス様がすべての点において、試みを受けられました。それは罪を犯してしまうかもしれない誘惑も含みます。私たちは、誘惑を受ける時こそ、神がそこで私が罪を犯すのを監視しておられて、罪を犯したら罰するような方に思えてしまいます。それは、悪魔が吹き込んでいる偽りの神の姿ですね。そうではありません。主は、罪を犯さないようにするために、私たちの試み、誘惑のただなかに来てくださるのです。私たちが良からぬ思いを抱くとき、良からぬことをしようとするとき、そうした誘惑があつて、自分で何とかしなければいけないと思い、もたえませんが、主ご自身がすぐそばにいてくださる、ということなのです！

その最も代表的な例は、荒野での誘惑です。ヨハネ第一に、「2:16 すべて世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は、御父から出るものではなく、世から出るものだからです。」肉の欲、目の欲、そして暮らし向きの自慢ですが、これは高ぶりと訳してもよいでしょう、この三つが世にある欲です。イエス様は、これらすべてを受けられました。ご自分が空腹を覚えられた時に、神の御子としての力を使って、石をパンに変えたらどうか？と悪魔が誘いました。これは肉の欲です。そして、神殿の頂から落ちたら、御使いが守ってくれることを悪魔が誘いましたが、それは人の目に触れる、目立つのですから、目の欲です。そして、高い山に連れていき、世のすべての栄華を見せましたが、これは暮らし向きの自慢、あるいは高ぶりです。

2B 引き上げることのできる方

しかし、イエス様は、これらの誘惑一つ一つに対して、みことばをもって対抗されました。石をパンに変えることについては、人はパンだけによって生きるのではなく、神の口から出る言葉によって生きると。神殿の頂から落ちることについては、主を試してはならないと。そして、高い山にいて、この栄華を与えるから私を拝みなさいと悪魔が誘ってきたときは、「主なる神のみを拝め」と言われて、サタンを退けられたのです。

ここに希望があります。主はすべての試みを受けられましたが、試みに屈して罪を犯すことはなかったのです。つまり、キリストのものにされた者たちもみな、試みを受けている時に、その同情してくださる方の力によって、誘惑に屈することをしなくてもよい力が与えられたのです。「1コリ 10:13 あなたがたが経験した試練はみな、人の知らないものではありません。神は真実な方です。あなたがたを耐えられない試練にあわせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えていてくださいます。」この試練は、誘惑とも訳すことができます。主は真実な方です。私たちが誘惑に抵抗して、脱出することのできる道も備えてくださいます。

そして、ここからが大事です。イエス様は血肉を取られて、私たちの弱さをすべて知っておられますが、この方は天において神の右に座しておられる方です。御子ご自身です。ですから、肉体の弱さを受けている時に、そのただなかにいる時に、私たちは主ご自身の天における臨在を受け取ることができるのです！私たちは、天国にいるようだと感じるためには、なるべく環境の良いところにおいて、クーラーもヒーターも完備されていて温度が適切に調整されていて、ゆったりとした空間において、心地のよい音楽でも流れていて、何か至福の時だなんていう時に、天国に近いと思うでしょうか？しばしば、ハワイが天国に最も近いところなんていう言葉があります。

けれども、そうではないのです。その苦しみのただなかで、主ご自身がおられるという天の喜びを味わうことができるのです。ヤコブがお嫁さんを探しにいくために、旅に出かけたときのことを思い出してください。彼が、自分がエサウだと偽り、父イサクから祝福を受けました。それで、エサウは殺したいと思いました。それを知った母リベカは、ヤコブに自分の実家に行きなさいと言いつけます。イサクも彼のために祈ります。それでたった一人、杖一本だけで旅にでかけました。そして、

野宿をしたのです。一つの石を枕にして寝ていました。なんと惨めでしょうか、逃げるようにして家を出ていき、兄エサウからは殺意を抱かれています。たった一人で野宿です。しかし、その時に彼が見たのは、天からのほしごです。御使いが上り下りしていました。主が語られました。アブラハムとイサクに与えられた祝福が、みなヤコブのものになることを宣言されました。それでヤコブが言いました、「創世 28:17 この場所は、なんと恐れ多いことだろう。ここは神の家にほかならない。ここは天の門だ。」それで、そこを神の家、ベテルと名付けたのです。

私たちが苦しい時にこそ、主とのかけがえのない出会いを経験した方は多いのではないのでしょうか？「詩 119:71 苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。それにより、私はあなたのおきてを学びました。」主が肉体を取られたことによって、その苦しみの中で天を味わうのです。

2A 恵みの御座 16

1B 憐れみと恵みの受容

そして、著者はこう言っています。「**私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて**」であります。私はこの言葉が大好きです。憐れみがいつも、必要だからです。憐れみは、本来なら受けなければいけない仕打ちを、受けなくてよいようにくださることです。自分が何か言った一言が失言で、それで大変なことが起こったとします。けれども、主が憐れんでくださって、事なきを得たとか、そういったことですね。そして自分の歩み、自分の家族の歩み、そして教会の歩みが、全く自分が何かしたからこうなったというのではなく、主が憐れんでくださったと証言することができます。「ロマ 9:16 ですから、これは人の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」主が憐れんでくださいます。

そして、「恵み」であります。これは、「本来なら、正しい人がその報いとして受ける祝福を、全くそんなことしていないのに受けている」ということです。義に対する報い、褒美を、不義な者なのに受けているということです。神は、自分が罪を犯したのに、キリストを信じていることによって、まるで罪を犯してなかったようにみなしてくださいます。キリストの内にいるがゆえに、私たちは、キリストの働きが自分のうちや周りに行われていきます。これは、驚くべきこと、恐れ多いことです。

パウロは、他の使徒たち以上に、多くの働きをしました。けれども、彼はこう言っています。「Iコリ 15:10 働いたのは私ではなく、私とともにあった神の恵みなのですが。」パウロは、キリスト者を迫害した調本人です。それなのに、彼は神の裁きを受けずに、憐れみを受けました。それだけではなく、福音を伝え、多くの働きをしました。これが神の恵みなのです。本来、キリスト者を迫害したものですから、そのまま神に打たれて死んでしまっただけなのです。しかし、生かしていただいただけでなく、義人が行う福音を伝えることを、罪人のかしらであるはずの彼が、他の使徒たちよりも多く行ったのです。これは、大きな、驚くべき恵みです。

2B 折にかなった助け

そして、私たちは、あわれみを受けて、恵みをいただいて、「**折にかなった助けを受け**」ます。私たちは、助けなど必要ないように、問題をなくしてほしいと願います。だから便利で、安全な社会にしようと努力するのです。お金にしても、神が助けてくださるならば、巨額の金額を預金に入れておいていただけたら、どれほど良いことだろうと思います。けれども、自分の預金には今月の生活費だけしか残っていないということがありますね。

私たちは、この肉体にある時に、その時々大きな必要が出てきます。しかし、神は、折にかなった助けを与えてくださるのです。ちょうどよい時に、助けてくださいます。だから、今後 20 年間生きることのできる金額を神はくださらないかもしれませんが、来月必要な額をくださるのです。その時々にご与えてくださいます。憐れんでくださり、それから恵んでくださるのです。

3B 大胆な近づき

そしてその時に、主に近づくことが必要なのです。「ヤコブ 4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたに近づいてくださいます。」そこで用意されたのが、「**恵みの御座**」なのです。

1C 恵みに変えられた御座

1D 聖なる御座

神の御座に近づくということは、本来、とてつもなく恐ろしいことです。主は聖なる方であり、決して汚れた者、欠陥のある者、罪ある者は近づくことはできないのです。近づけば、死ななければいけません。主がシナイ山に天から降りてこられる時に、主は境を設けなさいと言われました。「出 19:12 あなたは民のために周囲に境を設けて言え。『山に登り、その境界に触れないように注意せよ。山に触れる者は、だれでも必ず殺されなければならない。』殺されなければいけません。そして、主は幕屋を造り、のちに神殿を建てるように命じられます。そこには聖所があり、さらに奥に至聖所があります。垂れ幕で仕切られており、そこに万が一、誤って入るようなものなら、祭司とて死んでしまいます。アロンの子二人が、異なる火を携えていったら、火によって焼かれてしまいました。それほど、主は聖なる方であり、その御座は近寄りがたいところなのです。

神の御座の幻を、ダニエルが見ました。その部分を読みます。「7:9-10 私が見ていると、やがていくつかの御座が備えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭髮は混じりけのない羊の毛のよう。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、火の流れがこの方の前から出ていた。幾千もの者がこの方に仕え、幾万もの者がその前に立っていた。さばきが始まり、いくつかの文書が開かれた。」このような、恐れ多い、さばきの座が、神の御座なのです。

2D 流された血

しかし、イエス様が十字架につけられました。主は血を流されました。

3D 裂かれた垂れ幕

そして息を引き取られたその時に、大地震が起こりました。「マタ 27:50-51 しかし、イエスは再び大声で叫んで霊を渡された。すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。地が揺れ動き、岩が裂け、」聖なる神が座しておられる至聖所を仕切る、その垂れ幕が真っ二つに裂けたのです。しかも、上から下に裂けました。これは、天におられる神ご自身が、キリストの血による清めを受け取られて、それでご自身と私たちを隔てる仕切りを取り除いてくださったのです！

2C 子どものような信仰

だから今は、信じる者たちにとって、神の御座はさばきの座ではなく、恵みの座なのです。そこに近づく時に、大胆に近づくことができるのです。

1D 恐れなき自由

大胆というのは、元々、何かを語っても、処罰を受けることはない、その恐れがないという意味です。自分が神に近づいても、それで罰せられる恐れが全くないということです。それを大胆と呼びます。ちょうどそれは、大企業の CEO の部屋に、多くの許可とアポがないといけないのに、そのお孫さんは大胆にも、すべてを無視して、そのまま部屋に入っていくようなものです。幼子のような信仰を主は喜ばれます。弟子たちが、悪霊を追い出して喜んで戻ってきたときに、イエス様は父なる神をほめたたえました。「ルカ 10:21 天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。」私たちは、無邪気に、大胆に、そして図々しく、主の前に出て行って、そして、折にかなった助けを受ければよいのです。

私たちは主に近づくときに、本来、見てはいけない神の栄光を見ます。栄光が輝けば、私たちは滅んでしまいます。けれども、恵みによって栄光を仰ぎ見ることができるようにしてくださいます。「ロマ 5:2 このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」

2D 御名による願い

ですから、みなさん、大胆に願ってください。祈ってください。みこころにかなう祈りは、すべて聞かれます。主は、弟子たちをこよなく愛され、ご自身の名によって願いなさいと命じられました。「ヨハ 14:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは、何でもそれをしてあげます。父が子によって栄光をお受けになるためです。」「16:26-27 その日には、あなたがたはわたしの名によって求めます。あなたがたに代わってわたしが父に願う、と言うものではありません。父ご自身があなたがたを愛しておられるのです。あなたがたがわたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからです。」